

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

それぞれの人間によって微妙に異なる筆蹟というものが、個性をどのように反映しているか、それはたぶん、測定不可能なものであり、その程度も、ごく僅かなものではないかと思われる。

しかし、それは、人間の顔とか声とか体格とかいった肉体の事実性の場合とも、また、人間の衣服や食物や住宅などの選び方の場合とも、事情がおのずから違っているものではないだろうか。

そこには、言語表現に直接かかわる手の動きが、本質的に自由でありうるものとして前提されている。そこには、遺伝、経歴、環境、財産、職業などから、ほぼ独立できるふしぎな個人の抽象性が、そしてその範囲における洗練性や変幻性が、約束されている。

このように、最初からある程度の解放をかちえている人間の筆蹟は、その澁刺とした可能性において、やがて、芸術的な美しさにまで高められて行こうとしているものなのだ。その可能性はふつう僅かに実現されたまま閉じられているとしても、私たちは実際に、古来の書道をはじめとして、そうした文字のいわば芸術的な自己目的化をいろいろと眺めてきている。

詩人たちが自分の詩作品を書きしるすときの筆蹟は、もちろん、その芸術化を目ざしていない。ごく少数の例外はあるかもしれないが、自ら、書きしるすその文字のありようを心を労するほど、詩人たちは閑ではない。その眼は、文字ではなく、言語の組み合わせを、その関係の精妙な美しさを、探したり確かめたりすることに、熱中しているはずである。

しかしまた、それゆえにこそ、詩人たちが自らその詩作品を書きしるす筆蹟には、特異な運命の矛盾にあやつられている、個性的で無垢な美しさの芽生えがあるとさえ言えないだろうか。

詩人たちがそれぞれの好みで、本能的に形や勢いを整えようとしたそれらの文字は、一方において、無意識的な文字自体の美しさの芽生えの状態のまま氷りつこうとし、もう一方において、自らを手段として抹殺することにより、言語そのものの美しさの証明にほかならぬ詩作品を、この世の中に残そうと試みているのである。

詩人たちが自分の詩作品を書きしるす筆蹟は、こうした密かな矛盾を、不断に激しく生きていく。そして、そのことを、ほとんど誰にも知られずに、そのまま消えて死んで行く。

それは、譬えて言うなら、地球の上に舞い落ちる、人間の言語活動の、最もはかなく美しい枯葉ではないだろうか。

問1 「個人の抽象性」（傍線部ア）とあるが、それはどういうことか、説明せよ。 16. 6 cm X 2

問2 「そうした文字のいわば芸術的な自己目的化」（傍線部イ）とあるが、それはどういうことか、説明せよ。 16. 6 cm X 1

問3 「その関係の精妙な美しさ」（傍線部ウ）とあるが、それはどういうことか、説明せよ。 16. 6 cm X 1

問4 「地球の上に舞い落ちる、人間の言語活動の、最も儚く美しい枯葉」（傍線部エ）とあるが、それはどういうことか、説明せよ。 16. 6 cm X 2